共創学会 第 7 回 年次大会

共創する時空、いま・ここ

2023.12.8-10 日立シビックセンター

CONTENTS 目次

INFORMATION	ご案内	… 02
FLOOR MAP	会場案内図	… 04
TIME TABLE	タイムテーブル	… 06
KEYNOTES	招待講演	… 08
OS/WS	一般公開セッション OS/WS企画	… 09
INTERACTIVE	インタラクティブ発表	… 12
ORAL	口頭発表	… 20

INFORMATION ご案内

受付

【 場所 】　日立シビックセンター7F 701号室　(p.05の会場案内図を参照)
　　１Fアトリウムからエレベータをご利用ください.
【 時間 】　12月9日(土) 12:00 - 17:00 / 10日(日) 9:00 - 17:00

クローク

受付(701号室)にて貴重品以外のお荷物をお預かりいたします.

一般公開セッション

今回のOS/WS企画は一般公開セッションとなっております.
年次大会参加登録者以外にも自由にご参加いただけます.
(詳細は pp.09-11 のOS/WS企画の詳細を御覧ください)

招待講演・インタラクティブ発表・口頭発表へのご参加は事前参加登録者に限られます.

懇親会

12月9日(土)の18:00から会場2F多用途ホールにて懇親会を開催します.
事前参加登録して懇親会費をお支払いいただいた方はご参加ください.

インタラクティブ発表講演者の方へ

インタラクティブ発表の会場は2F 多用途ホールです.
本パンフレットでご自身の発表番号(IN-**)をご確認の上, ポスター等の掲示をお願いいたします.

なお, 12月10日(日)は, 多用途ホールは年次大会の会場となっておりません.
発表終了後は当日中に掲示物の撤収をお願いいたします.

口頭発表講演者の方へ

口頭発表の時間は発表15分・質疑応答10分の計25分です.
発表終了後は次の講演者の方にすみやかに交代できるようご協力お願いいたします.

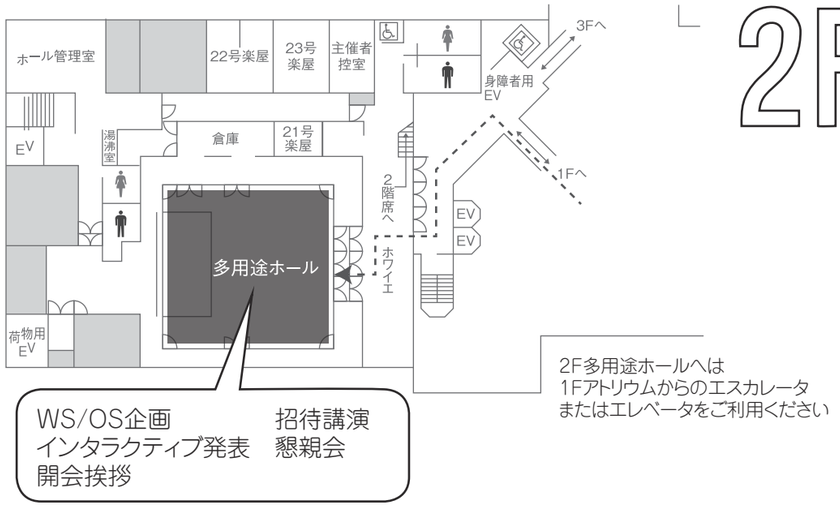
その他

- 会場内ではWiFiが使用できます.
  SSID/パスフレーズは会場室内に掲示されております.
- 会場内は禁煙です.
- 講演資料等を撮影される場合は予め講演者の許諾を得てから行ってください.
  なお, 実行委員会にて記録等のため, 会場内を撮影・録画する場合がございます.
- 会場周辺には飲食店やスーパーマーケット等の商業施設があります.
  よろしければ, ご利用ください.

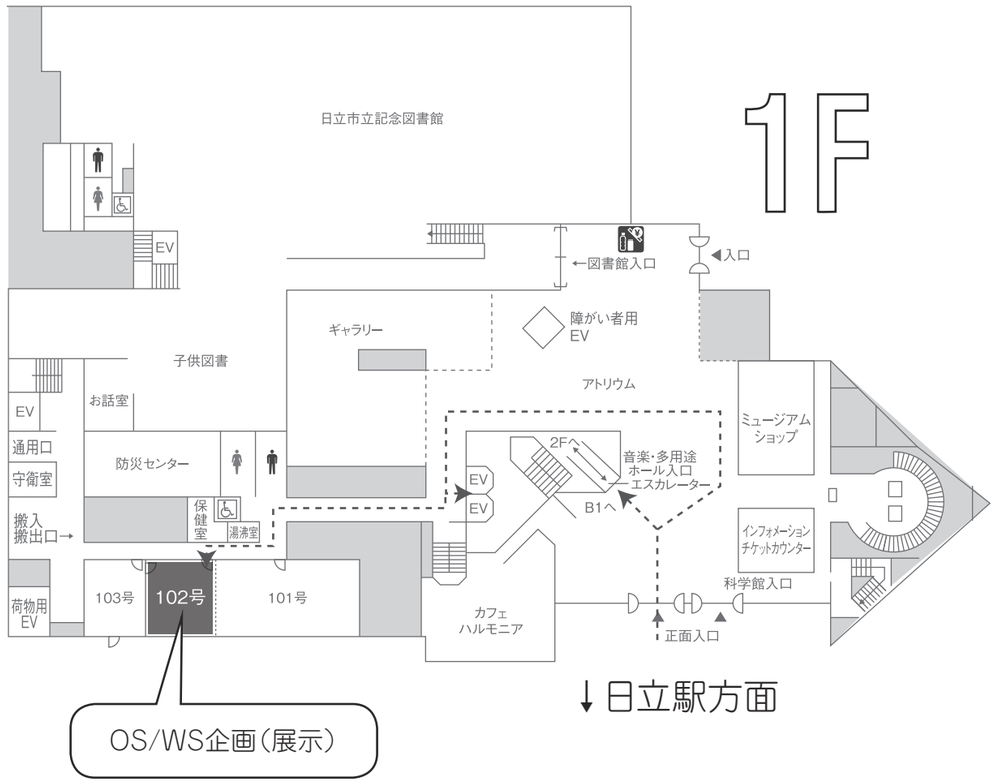
FLOOR MAP

会場案内図

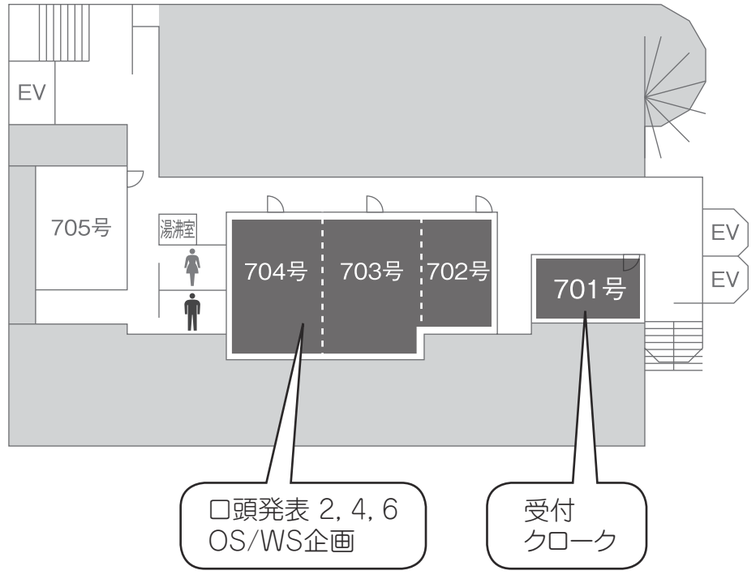
2F



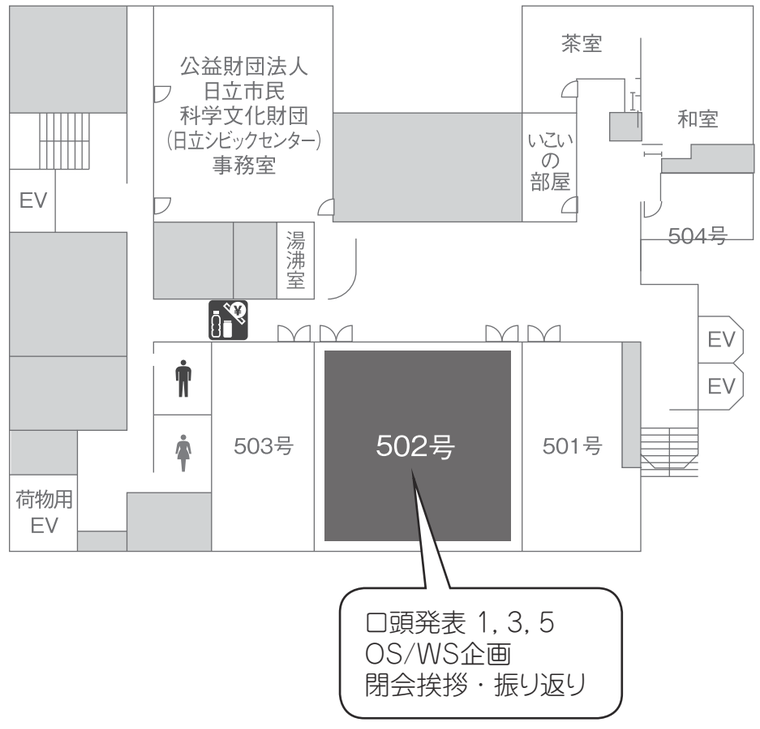
1F



7F



5F



TIME TABLE

タイムテーブル

一般公開セッション OS/WS企画 ・・・ どなたでも参加いただけます

講演セッション ・・・ 事前参加登録者のみ参加いただけます

懇親会 ・・・ 事前参加登録者のみ参加いただけます

12.8 Fri

16:00 – 18:00

一般公開セッション OS/WS企画
（多用途ホール・102号室（展示））

「アートの転回：『わたし』における世界の感じ方」

代表者：郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

12.9 Sat

10:00 – 12:00

一般公開セッション　OS/WS企画（多用途ホール）

「共創を拓く～文化施設は共創の場となるか」

代表者：横山 歩（公益財団法人神奈川芸術文化財団）

一般公開セッション　OS/WS企画（702-704号室）

「版画と建築」

代表者：植原 雄一（株式会社植原雄一建築設計事務所）
田中 彰

受付
当日登録
クローク
（701号室）

12:50 – 20:00

- 開会挨拶（多用途ホール）
- 招待講演 1（多用途ホール）「心の中の身体」 松宮 一道（東北大学）
- 招待講演2（多用途ホール）「シオマネキにおける Proto metacognition の可能性 ：空間認知と社会行動の共進化の果て」 村上 久（京都工芸繊維大学）
- 休憩
- インタラクティブ発表 グループA（多用途ホール）
- インタラクティブ発表 グループB（多用途ホール）
- 休憩
- 懇親会（多用途ホール）

12.10 Sun

9:00 – 10:30

- 口頭発表 1（502号室）
- 口頭発表 2（702-704号室）

休憩

10:50 – 12:20

- 口頭発表 3（502号室）
- 口頭発表 4（702-704号室）

昼食

13:10 – 14:50

- 口頭発表 5（502号室）
- 口頭発表 6（702-704号室）
- 閉会挨拶・振り返り（502号室）

15:00 – 17:00

一般公開セッション　OS/WS企画（502号室）

「池袋カフェlampの共創」

代表者：浦上 大輔（日本大学）

一般公開セッション　OS/WS企画（702-704号室）

「ミニ・ヒューマンライブラリー：
マジョリティが纏う特権について考えてみよう!」

代表者：福村 真紀子（茨城大学）

KEYNOTES

招待講演

13:00 - 14:40
12.9 Sat

心の中の身体

松宮 一道（東北大学）

2000年 東京工業大学 大学院総合理工学研究科　博士課程修了。博士（工学）。同年、カナダ・ヨーク大学 視覚研究所 博士研究員。2002年 東京工業大学 像情報工学研究施設 研究機関研究員。2004年 ATR人間情報科学研究所 専任研究員。2005年 東北大学 電気通信研究所　助手。2007年新職階制移行により同助教。2014年同准教授。2016年JSTさきがけ研究者兼任。2018年 東北大学 大学院情報科学研究科 教授、現在に至る。2017年に第13回日本学術振興会賞、2023年に令和5年度科学技術分野の文部科学大臣表彰　科学技術賞（研究部門）を受賞。専門は心理物理学

心の中で感じている自分の身体（＝心の中の身体）は、自分の身体に対する意識的体験であり、その意識的体験は目に見えない。そのため、心の中の身体は古くは哲学的な問題として扱われてきた。しかし、1998年に心の中の身体を操作する実験心理学的手法が開発され、現在は心の中の身体の認知メカニズムを調べることができるようになった。本講演では、従来の心の中の身体の操作手法にバーチャルリアリティ技術を融合させることで明らかになってきた、心の中の身体の形成過程と脳内表現、そして、心の中の身体と運動能力の関係について紹介する。

シオマネキにおけるProto metacognitionの可能性：空間認知と社会行動の共進化の果て

村上 久（京都工芸繊維大学）

2015年神戸大学大学院理学研究科博士課程後期課程終了、博士（理学）。早稲田大学基幹理工学部博士研究員、神奈川大学工学部特別助教、東京大学先端科学研究センター特任助教を経て、2021年より京都工芸繊維大学情報工学・人間科学系助教。ミナミコメツキガニ、オキナワハクセンシオマネキ、アユ、ヒト（歩行者など）を対象としながら、群れ行動、探索行動、ナビゲーションに関する計算機モデル構築と実験を行なっている。

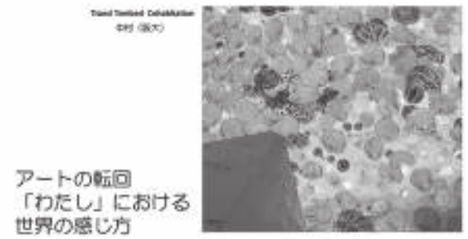
自己意識や反省的意識はヒトを特徴づけるとされてきたが、現代では霊長類をはじめいくつかの分類群もこれらを持ちうると考えられている。「人間のような」高次の認知の有無をテストする課題に特定の動物はパスできると考えられている。しかし「人間のような」認知の有無を問うのではなく、その進化的起源を辿るには動物の身体を含む生態学的コンテクストを踏まえた実験が必要ではないか。本研究ではシオマネキというカニを対象とし、社会行動と空間認知の関係を検証する実験から、そのヒントを探る。結果としてこのカニは、巣穴位置に関する２種類の記憶（運動に直結する記憶とそれを評価するシステム）を持つことが示唆された。ここから空間認知と社会行動の共進化の果てに原初的なメタ認知が出現してきた可能性を議論する。

OS/WS

一般公開セッション
オーガナイズドセッション･ワークショップ企画

オーガナイズドセッション･ワークショップ企画は一般公開セッションです.
年次大会への参加登録をされていない方もご自由に参加いただけます.

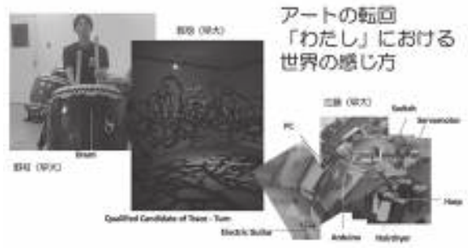
アートの転回：「わたし」における世界の感じ方

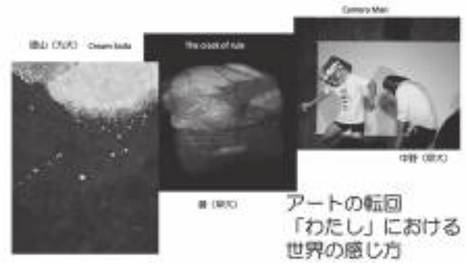


代表者：郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

多用途ホール・102号室（展示）

比較可能なものを「ならば」で接続し構成される論理的世界、合理的思考に対し、アートは異質なものの接続を志向する。そこには、異質なものを受け入れるよう、「わたし」やもの、ことを調える、アート的な論理があるはずだ。そのようなアート的思考様式は、何かの役に立てるということではなく、「わたし」の外部を受け入れ、「わたし」の世界を広げるものだろう。ここではさまざまな形で「アート」を実践する者がその実践を示しながら語り、論じ合い、聴衆に爪痕を残したいと思っている。





12.8 Fri
16:00 - 18:00

12.9 Sat
10:00 - 12:00

版画と建築

代表者：植原 雄一
（株式会社植原雄一建築設計事務所）
田中 彰

多用途ホール

フィリピンにいる版画家が現地で建築をつくり、日立にいる建築家が現地で版画をつくる試み。お互いの許容範囲（たまに逸脱）の中での交換的な創作。「版画」「建築」そして「いま・ここ」。それらは世の中の万物と同様に常に揺れ動き、ときに姿を変えて立ち現れる。

共創を拓く
～文化施設は共創の場となるか

代表者：横山 歩
（公益財団法人神奈川芸術文化財団）

702-704号室

事例紹介
○ インクルーシブダンスワークショップ&ファシリテータ育成講座
「のはらハみどり」
○ 神奈川県共生共創事業Orihime（オリヒメ）プロジェクトトーク・セッション
○ 西 洋子（共創学会副会長、東洋英和女学院大学教授）
○ 横山 歩（共創学会会員、 公益財団法人神奈川芸術文化財団　本部調査担当部長）
○ 熊井 一記（公益財団法人神戸市民文化振興財団　神戸文化ホール事業課長）
○ 小池 浩子（（株）シアターワークショップ事業推進部マネージャー、劇場コンサルタント）

近年、数多くの社会課題のなかでも「共生社会の実現」というフレーズがよく使われているようだ。社会課題解決が業務の主題のひとつである行政分野は、現状の政策のなかでこの言葉に必ず触れているとしても、過言ではないだろう。この言葉の指し示す範囲は広大で、様々な課題解決の手法が考えられているが、その中でも行政の政策実現装置のひとつである公立文化施設では、これまでの芸術・文化振興という活動をふまえて、この課題解決のために、芸術、表現活動を土台にした、共生社会実現への取り組みを行い、かつその事業を共創という言葉でくくっているケースが散見される。共創という言葉の用法が適確かという議論はさておき、芸術・文化・表現という分野は、他者との関係を開発していく過程において、共創という概念と親和性があるためではないかと推測できる。今回はオーガナイズドセッションとして、公立文化施設における“共創的”事業の事例紹介をするとともに、文化施設（公立に限定するわけではない）は共創の場となり得るかというテーマで、共創的事業の活動者、劇場関係者、劇場コンサルタントの諸氏を交えて議論する場を設けたい。

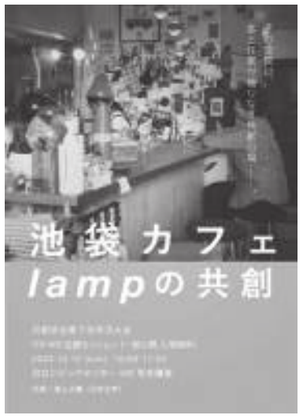
12.10 Sun
15:00 - 17:00

池袋カフェlampの共創

代表者：浦上 大輔（日本大学）

502号室

発表・展示：
北村 香里（cafe*lamp店主）
大江 直哉（映像ディレクター）
リュウ ジェシー（3Dデザイナー）
吉田 大和（絵描き）
寺田 みなみ（俳優）
嘉山 由樹（造形作家）
伊勢 和宏（コレクター）
つえたにみさ（アーティスト）
砂糖 ゆき（イラストレーター）
前田 実香（アクセサリー作家）
長津 徹（常連客）



東京西池袋の静かな住宅街、美大予備校のとなりの白い外観が印象的な小さなお店。カフェlampは店主の北村香里さんが一人で営業しています。おいしい食事と飲み物、そして店内には様々な作家さんの個性豊かな作品が月替わりで展示されています。カフェlampはギャラリーでもあります。また、サロンのように常連客同士あるいは店主の香里さんとの会話を楽しむ場所でもあります。その空間は小さな共創の場です。

本OSの発表者はカフェlampのお客さんでもありかつ作家でもある方々です。発表者はイラストレーター、画家、造形作家、映像作家、ハンドメイド作家、俳優、旅人、研究者などです。OS会場に発表者の作品を展示します。くわえて、発表者が順番に登壇してカフェlampとの関わりや自身の創作活動についてプレゼンをする時間を設けます。店主の北村香里さんにも登壇していただいて、カフェlampのコンセプトや想いを語っていただきます。発表者が自身の作品のそばで、インタラクティブにOS参加者と意見交換をする時間も設けます。

ミニ・ヒューマンライブラリー：
マジョリティが纏う特権について
考えてみよう！

代表者：福村 真紀子（茨城大学）

702-704号室

「ヒューマンライブラリー」（以下、HL）とは、人が「本」になってその人の生き方や人生を語り、「読者」が「本」の語りを聴いて「本」との対話をするイベントです。

今回のHLは、「私のマジョリティ性」というテーマで「本」に語っていただきます。私たちは、インクルーシブな社会のあり方を検討するためにHLをさまざまな場所で企画しています。ほとんどの人がマジョリティ性・マイノリティ性という側面を持っていますが、自分のマイノリティ性には敏感でも、マジョリティ性やそれにより無意識に身に纏う特権には気づきにくのではないでしょうか。「本」の語りから「読者」も自分のマジョリティ性について考えられるかもしれません。マジョリティが纏う特権について考え、インクルーシブな社会とは何かについて、みなさんと話し合いたいです。

INTERACTIVE A

インタラクティブ発表
グループA

12.9 Sat
15:00-16:00

IN-01 認知症と共に生きる人が直面するコミュニケーションの問題に関する調査

○ 小野 明日香（NTT人間情報研究所）
山中 綾華（NTT人間情報研究所）
瀬古 俊一（NTT人間情報研究所）
松川 尚司（NTT人間情報研究所）

認知症のコミュニケーションの問題について，認知症の人の視点からとえたときの構造を明らかにすることを目的に，認知機能といったその人固有の特徴による要因（個人要因）だけでなく，相互の関係性や相手の態度といった社会的な環境による要因（環境要因）を追加したアンケート調査を行った．分析の結果，個人要因だけでなく環境要因も会話の目的の達成（会話ゴール）の困難さや会話ゴールまでのメッセージの処理過程（会話プロセス）の困難さに影響することが示唆された．加えて，会話中に立場の弱さを感じることや自己呈示の不満を感じることは，圧迫感を感じることに影響することが示唆された．

IN-03 対話エージェントの第一印象がインタラクションに及ぼす影響

○ 星村 駿（大阪工業大学大学院）
松井 哲也（大阪工業大学大学院）

対話エージェントは，技術発展により進化しているなか，エージェントの容姿も増えている．そのなかで，擬人化されたエージェントは多く存在し，場面に適したサービスに利用されている．この擬人化エージェントの研究で，エージェントの印象には目の表現が性格を表す実験結果が得られている．本研究では，擬人化エージェントとのインタラクションでユーザの抱く第一印象に着目し，エージェントに適当，不適当な性格を付与した時の影響を調べる．予備実験として，アンケートによるエージェントの印象調査と会話内容のテキストによる印象調査の2つを実施し，結果をもとに，印象をエージェントに付与した際，インタラクションに与える影響を調べる．

IN-05 「遊園地らしさ」を形作るサービスエンカウンターの相互行為

○ 新保 冴弥（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本研究では，遊園地のスタッフが子どもの来園者との相互行為で「遊園地らしさ」をどのように共創しているかを明らかにする．遊園地におけるサービスエンカウンター場面の接客を撮影し分析した．スタッフは，子どもの行為や視覚的情報，自身のそれまでの発話のしかた，架空の他者の発話などを手掛かりとして，肯定的な評価をする，対照的な発声を行う，子どもの興味関心への理解を示す，伝聞表現で発話への責任を弱めるなどのプラクティスを用いて，子どもとの心理的距離を縮めながら，接客に必要な相互志向性を確立・維持していた．スタッフはこのようなプラクティスを活動に組み込むことで「遊園地らしさ」という全体的性格を共創していた．

IN-07 累積された共在経験が居場所を生み出すプロセスの相互行為分析

○ 齋藤 巴菜（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本研究では，日常生活において居場所が立ち現れる事例として，第一筆者である齋藤が，所属する大学研究室の学生たちと共在している状況で，過去の共在経験の累積に基づいてどのように行為がつくり上げられ，それに対するどのような反応によって親密な関係性が確かめられるのかについて参与観察と相互行為分析を行った．その結果，協働的行為として他者の習性を引用し行為を産出することで他者への理解をデモンストレーションしたり，遊びというフレームの中で虚構的な非対称関係を互いにつくり合い，維持することによって，互いの関係性が確かめられ，居場所が立ち現れたことが示唆された．

IN-09 「何食べる？」が決まるまでの相互行為分析

○ 山田 和香（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本研究では，「何食べる？」という食事前の相互行為に着目する．何を食べるのかが決まるプロセスに影響を与えているものは何か，どのような相互行為を行うことで何を食べるかの決定に近づいていくのかなどを分析することで，生活における食事前の相互行為の重要性を明らかにする．私が友人と何を食べるかの話し合いをした映像を分析した結果，何を食べるのかが決定するまでの変遷には段階があり，何を食べるのかが決定するまでのプロセスにおいて，各々が好き勝手に食べたいものを主張するのではなく，ある選択肢が選ばれてもよいことを互いに確認し，その選択可能性を高めていることがわかった．

IN-11 デザインプロジェクト参加者の共創関係をつくる多義創発型カンファレンスの実践

○ 小林 陽昭（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本稿では，公立はこだて未来大学生らが立ち上げた長屋デザインプロジェクトにおいて，参加者らが自分ごととして関与し合う共創関係を築くための手法として，ビデオリフレクションを活用した多義創発型カンファレンスを実践し得られた知見を報告する．デザイン実践を面白がりながら多様な視点でリフレクションすることで，参加者らが認識の違いのすり合わせ，活動に対する満足感の共有，自分ごととしての関与，プロジェクト活動の広がりが確認できた．また，ビデオリフレクションの負荷やカンファレンスの開催時期に関して改善するべき点が明らかとなった．

IN-13　コミュニティの映像エスノグラフィーによる研究 - 映像『札幌市石山エリアの人びととコミュニティ』と上映実践 -

○ 荒川　柳（札幌市立大学）
伊田　博光（札幌市立大学）
横溝　賢（札幌市立大学）
坪内　健（札幌市立大学）
小田　和美（札幌市立大学）

石山エリアの何が，人々を引き付けるのかという不思議な魅力を明らかにすることと，その手法として映像を用いることで，その不思議さをより明快に伝えることができるのではないかと考えた．地域のキーパーソンとの関係が深まることにより，「石山150周年イベント」において今回撮影した映像を使った映画上映会の機会を得ることとなった．映像に利用するインタビューの形式は構造化インタビューとした．石山の魅力については人が魅力と答える方が多く，石山エリアに関わる人達の感情の共有がなされているように感じた.映像エスノグラフィーの方法論を採用した一環で制作した映像を通じて，対話と学びの機会を創出できたことを明らかにした．

IN-15　カプセルトイ愛好家，フィールドワーカーとして目覚める

○ 髙澤 佳乃（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）
南部 美砂子（公立はこだて未来大学）

本稿では，第一著者（以下，著者）が大学院の授業でフィールドワークという調査方法と出会い，実践し，フィールドワーカーとして目覚め，成長していく過程について報告する．実践のフィールドは，カプセルトイ愛好家の著者がよく足を運んでいた，あるカプセルトイコーナーであった．現場での気づきや，フィールドワークの技法を身に着けるきっかけとなったもの，調査を進める中で生じた自身の変化や，明らかになってきた著者にとってのフィールドワークの意義を，当時のフィールドワークの最中に書きためたフィールドノートをもとに考察する．

IN-17　ラクガキ思考ー対象との心理的距離を模索する行動の解明

○ 男澤 詩織（札幌市立大学）
福田 大年（札幌市立大学）

本研究は，ラクガキが自己表現ツールであり，アイデア生成の一助になり得ることを解明することが目的である．筆者は授業中やアイデアの検討中にラクガキを行なっている．他者も同様に行なっているのかを疑問に思い調査した．2回の調査を経て，対象との心理的距離をはかる中でラクガキが発生する場合と，時間をやり過ごす手段としてラクガキする場合がある可能性を見出した．

IN-19　不確実性の変化に伴うプレイヤーの情動的行動傾向

○ 関根 拓人（茨城大学）
笹井 一人（茨城大学）

我々がテクノロジーと関わる時，しばしば情動的な反応を伴っているといわれている．"情動"とはスピノザによって定義された概念であり，感情の働きという意味に加えて，別の身体との相互作用によって心身に生じる変化を意味する．
本研究では不確実性を含む題材として，「カードチキンレースゲーム(CCRゲーム)」を採用し，（1)行動の選択に伴う思考時間を制限した場合（2)プレイヤーがもつ情報の信頼性を制限した場合について，それぞれ人間のプレイヤーとボットによる対戦を行った．プレイ中のプレイヤーの行動記録とアンケート結果から，プレイヤーに与える情動的な影響について評価を行う．

IN-21　ラフ集合誘導束を用いた読者感情による小説分析手法に関する研究

○ 三野宮 楓太（茨城大学）
笹井 一人（茨城大学）

本研究では，ラフ集合誘導束を用いて小説の読者の感想や感情から，うまく小説を分析することを目的とし，評価やレビューの一つの方法とすることに繋げることができるのではないかと考えている．ラフ集合誘導束は，感性工学などの分野で用いられ，曖昧な情報から上手く情報を抽出することが出来るため，今回，小説の分析に用いることとした．方法としては対象作品を複数人に読んでもらい，アンケートを集め，それらにラフ集合誘導束を適用することで，目的に沿った結果を得ることを目指した．そして，上手く小説を分析するという目的に沿った結果を得ることが出来たと考える．

IN-23　地域課題解決型サービスの価値分析とインタラクティブな表現方法の提案

○ ロ テンセキ（武蔵野美術大学）
鈴木 七世（武蔵野美術大学）
外山 結衣（武蔵野美術大学）
長谷川 敦士（武蔵野美術大学）

本研究では，顧客価値連鎖分析(Customer Value Chain Analysis)と文化モデル(Cultural Model)を組み合わせたサービスモデルの記述方法を使用し，地域課題解決をテーマとした複数のサービス事例におけるステークホルダーと個々の相互関係性や価値提供の分析と考査を行った．上記に加え，地域課題解決型サービスにおける各種の行為や相互作用の時空間的なつながり，および主体同士の関係性の変容を明示し，顧客価値分析に時空間的な変化を体感させる「ゲーム」という新たなインタラクティブな表現方法を提案した．

IN-25　計算と創造的知能

○ 澤 宏司（同志社大学）

数の計算を「個々の計算」とそれらをまとめる「計算体系」に分け，これらの関係について検討をする．通常の計算観ではこの2つに差異や矛盾はなく，違いがある場合には計算のエラーとみなされる．その一方で，たとえば実数から複素数に至る体系の拡張は，計算のエラーに起因する新しい体系の確立ともいえる．この「個々の計算」と「計算体系」の両立を無謬としない見立ては，「いま，ここ」の計算を尊重したうえでの新しい創造とみることができる．本稿では，筆者が実践する「サワ☆博士の数楽たいそう」を，郡司ペギオ幸夫の「天然知能」に接合させる．計算を端緒とする知能の展開を介して，共創の理論的展開につながることを期待している．

IN-27　媒介的対話状況での話者の空間認知の影響に関する研究

○ 鈴木　優太（茨城大学）
熊谷　遼太（茨城大学）
笹井 一人（茨城大学）

近年コロナウイルスによる影響によりオンラインを使用した会議や授業の機会が増えた．その影響によりオンラインコミュニケーションのストレスや人との関わりが薄れてしまった問題が増えた．その解決策としてエージェントを使用した人とのかかわりを感じることや対話の支援を目的とした研究行われている．筆者は特にTeamsなどを使用したオンラインコミュニケーションにて利用されている「おいとけさま」は近年発達しているメタバースでの対話にも有効的な概念であると考えた．本稿では「おいとけさま」を仮想空間でも利用可能とするエージェントの提案と実験方法について述べる．

INTERACTIVE B

インタラクティブ発表
グループB

12.9 Sat
16:00-17:00

IN-02 幼稚園3歳児1学期における子どもの好意的かかわり

○ 西山 萌（お茶の水女子大学）
刑部 育子（お茶の水女子大学）

本研究では，日本の幼児教育の父・倉橋惣三が提唱した，幼稚園における子ども同士の対等で交渉的な「相互的」関係に着目する．倉橋が相互的関係の中で特に重視した「好意」的かかわりあいによって何を経験しているのかについて，幼稚園3歳児クラス1学期の実際の事例から検討することが本研究の目的である．事例の検討を通じて，何気ない行為や言葉で示された友達の好意によって，子どもは緊張を和げたり，互いに嬉しい気持ちを弾ませあったりしていることが明らかになった．また，好意が受け取られない場合には，保育者が代わりに好意を受け取ることもあることが示された．

IN-04 長期に継続する住民活動の仕組みを解き明かす ー「いしやま朝市」の参与活動を通して

○ 秋本 真希（札幌市立大学）
伊藤 悠貴（札幌市立大学）
長岡 南風（札幌市立大学）
丸山洋平 (札幌市立大学)
武冨貴久子 (札幌市立大学)
横溝 賢 (札幌市立大学)

いしやま朝市は，札幌市南区石山地域で開催されている，商店および近郊の農家が新鮮な品々を持ち寄る“ミニ商店街”である．この朝市は地域住民同士が自発的に始まった事業であり，18年間以上継続して開催されている．こうした事業が長期的に継続する事例は少ない．本稿では，いしやま朝市での参与観察を通じて，長期に継続している仕組みを，朝市運営者，出店者，参加者の三つの立場から明らかにする．また，参与観察，「モノ」「コト」を介して，筆者らが，いしやま朝市関係者といかにして関係性を構築していくのか，そのプロセスを探究していく．

IN-06 人は気まずい沈黙にどう向き合っているか

○ 澤田 菜乃（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本稿では，会話中に生じる気まずい沈黙とは何か，人がその気まずさにどう向き合っているかを明らかにする．分析1では，直感的に気まずいと感じる沈黙とそうでない沈黙を比較し，自己選択で誰かが話し出すべき沈黙を気まずい沈黙と定義した．また，会話への志向が不均衡な場合に，沈黙が気まずいものとなっていた．分析2では，話し出してもいいはずの特定の人がいる場合，誰かが会話への志向をそらしつつ発話することで，話し出す責任が弱められていた．話し出してもいいはずの特定の人がいない場合，話し出すべき1人が連鎖を閉じることで，誰かが話し出すべき度合いが弱まっていた．人は気まずい沈黙の性質を見分けて向き合い方を変えていた．

IN-08 馴染みのないスポーツの面白さを捉える方法の探究

○ 辰己 尚矢（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本研究では、筆者にとっての馴染みのないスポーツの面白さを捉える方法を明らかにする。オリンピック等で日本人選手の試合だから応援するなど、社会的な関わりの一つとして馴染みのないスポーツを観戦する機会はたびたび発生する。このような馴染みのないスポーツを観戦する際に、そのスポーツの経験がない場合でも、はっきりとその瞬間の熱量を享受することができるのはなぜだろうか。これらを明らかにするために、筆者にとっての“馴染み”という観点で馴染みのないスポーツの面白さを捉えるための方法を模索した。結果として、馴染みのないスポーツを観戦する際の認知的な変化を捉えることが、面白さを捉えるための方法だと明らかになった。

IN-10 相互行為によるジャムセッションのセクション構築

○ 鈴木 楓（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本研究では，即興的なジャムセッションにおいて，演奏時の相互行為に着目することでセクション間の演奏をどのように構築していくのかを明らかにする．ビデオデータは，第一著者が演奏者として参加したギターとドラム（第一著者）で行われたジャムセッションを撮影したものである．分析・考察の結果，演奏時の相互行為の要素である身体的ふるまいはセクション展開が始まる合図や演奏表現を強調する役割，演奏表現はフレーズやリズムを意図的に単純にする役割を担っていた．ジャムセッションという演奏形態の即興性を実現するために相互行為も即興的に行われており，演奏表現と身体的ふるまいを用いてセクションが構築されることがわかった．

IN-12 日常の観察と解釈から生まれるキャラクター - 「〇〇に見える」パレイドリアを利用したアイデア生成プロセス -

○ 谷口 風太（札幌市立大学）
福田 大年（札幌市立大学）

何かが別の「〇〇に見える」現象であるパレイドリアが発生した風景の写真をもとに筆者がキャラクターを制作した.一人称的な当時の思考を振り返る視点と他者のなぜこうなったという視点によって，制作プロセスで発　生する無意識的な判断や思考を言語化していき特徴を解明した.パレイドリアを利用したキャラクターデザインで は連想，解釈，デフォルメを行いながら要素が形成されていくプロセスがあるとわかった．

IN-14　とある絵本カフェでの居心地の共創

○ 藤田 華奈（公立はこだて未来大学）
南部 美砂子（公立はこだて未来大学）
坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

本稿は，人見知りで一人時間が好きな第一著者（私）が，授業の一環として訪れた絵本カフェで店主らと居心地を共創していく様子を記したオートエスノグラフィである．初めて訪れた日，私はカフェの雰囲気に委縮し，自身を部外者だと認識してしまう．しかし常連を演じることをきっかけに，自身に対する認識は変化していった．結果的に，店主らからの認識を基に特定の客として居場所をつくり，店主らは私の性格や特性を察して私に合った居場所を提供したことで，互いにとって居心地の良い空間を共創していた．私はこの体験を絵本で表現し，他者に共有することで，カフェの外で共創するきっかけづくりを行った．

IN-16　高齢者の孤独感に着目したコミュニケーション・カフェの実践 - ICTの進化と発展に着目して -

○ 吉田 隼騎（札幌市立大学）
石崎 航琉（札幌市立大学）
張 莫仲（札幌市立大学）
横溝 賢（札幌市立大学）
村松 真澄（札幌市立大学）

本研究の目的は，ICTに対する高齢者の受け入れ状況の分析と，歴史的変遷を取り入れたコミュニティ・デザインがICTの受け入れ状況にどう影響するかを明らかにすることである．研究方法は，量的横断研究デザインを採用しコミュニケーション・カフェの参加者を対象に質問紙調査を実施した。得られたデータは記述統計を行った．結果，高齢者のICTに対する興味関心は「簡単さ」よりも「楽しさ」で誘発され，歴史的変遷を取り入れたコミュニティ・デザインには「高齢者が新しいものを受け入れ易くする」可能性があることがわかった．高齢者がICTを受け入れ，一定の水準で使いこなすことは，高齢者の生活を全般的に豊かにする可能性がある．

IN-18　バーチャルエージェントの選好推定における外見の影響

○ 坊農 俊浩（大阪工業大学）
松井 哲也（大阪工業大学）

本研究の目的は人がバーチャルエージェントの外見から、エージェントの好みをどのように推定するかを調べることだ．外見が選好の推定に与える影響を調べるために，特徴のないエージェントと服装が違うキャラ付けされたエージェントの2体を用意し，実験参加者にバーチャルエージェントの好きなモノを当てるというタスクを行ってもらった．タスクはエージェントの好きなモノを当てるまで，エージェントの好きそうなものを単語で尋ねるという内容だ．実験で得た単語から実験参加者が選んだ単語同士で類似度を計算し規則性が無いかを調べる．

IN-20　ロボット介護機器臨床評価ガイダンスの開発 - インタビュー・ワークショップを通した課題の抽出 -

○ 三輪 洋靖（産業技術総合研究所）
渡辺 健太郎（産業技術総合研究所）
細野 美奈子（産業技術総合研究所）
梶谷 勇（産業技術総合研究所）

高齢化と労働人口の減少に伴う介護人手不足を解決するため，ロボット介護機器の活用が期待されている．そこで，機器開発企業を対象として，ロボット介護機器臨床評価ガイダンスを開発してきた．本稿では，より実用的で有益なガイダンスに向けた改訂のために実施した取り組みについて報告する．具体的には，開発したガイダンスについて，開発企業や介護ロボット関係者へのインタビュー，ワークショップを行い，ユーザーの視点からガイダンスの重要なポイントや課題を明確にした．

IN-22　逆ベイズ推論による視線予測に関する研究

○ 久保田 隆一（茨城大学）
笹井 一人（茨城大学）

フリストンらは、人間の認知基盤を予測モデルで説明する予測符号化理論を提唱し、この予測モデルにはベイズ理論が用いられている。しかし、人間の注視行動には、微細な眼球運動と大きな直線運動が共存しており、学習が進むにつれて情報が縮小するベイズ推論では、大きな直線運動を説明できない。そこで、郡司らが提案した創発的予測モデルの学習適応過程と人間の視線行動には、レヴィウォークと呼ばれる共通の特性があることが確認されている。以上のことから、創発予測モデルを2次元平面に拡張することで、人間の眼球運動を予測できるのではないかという仮説を立てた。この仮説に基づき、既存手法との予測性能の比較を行った。

IN-24　Roediger達の記憶実験を応用した対話エージェントの性格選択手法についての検討

○ 上野 彰大（茨城大学）
笹井 一人（茨城大学）

対話エージェントの性格を人間に合わせて選択することは，人間とエージェントの関係性を良くするために有効な方法であると考えられている．本研究では，記憶における個物とカテゴリの認識に関する分類を用いることが可能か確認するための実験を行った．具体的にはRoedigerらの記憶に関する実験を拡張し実施した．結果としては，単語を記憶する際に，記憶した単語のカテゴリ名となる単語を記憶したと錯覚するような誤記憶が生じた．また，そのカテゴリ名と誤記憶の生じやすさには個人差があることが分かった．この結果から，記憶テストを用いて内向的か外向的を判断し，対応したエージェントを選択できる可能性を得られた．

IN-26　地域コミュニティでの心の循環による食資源循環

○ ラスク ガブリエル（中京大学）
淺川 仁都（中京大学）
宮田 義郎（中京大学）

人間は自然界の全ての生物と同じ資源の循環の中で生きている.しかし現代社会では食品廃棄などで資源が循環から不可逆的に漏れ出し、循環が弱まっている.豊田市のコミュニティで食ロスを土壌微生物により堆肥化することにより循環に戻す試みの中で、大学生と大学生協、大学生協の店員同士、行政と市民、市民の家族内、家族同士など、多くの共創が起こった.これらの事例から、それまでつながっていなかった人の想いが共有されることにより、資源の循環が実現していったことが明らかになった.このような「心の循環」による「資源の循環」を、地域コミュニティの中でネットワーク的に展開していく可能性について考察する.

ORAL 1

口頭発表 1

12.10 Sun
502

OR-01 裂けられたワームホールに生きていく
― 相互予期モデルによる「規則」への考察

○ 黄 昱（早稲田大学）

規則を従来の陰陽の渦から脱出させ、浅田彰が言うピュシスとカオスを考えながら、郡司ペギオ幸夫と村上久とが提起した相互予期モデルを通して、ある一つの可能的構造を見出す。そして、この思考を踏まえ、自分の感じた規則と比較しつつ、映像として実装した作品を解説する。

OR-02 酵母の文通を通じた社会的なデザイン実践の試み
―自立した生を共につくる共赴性という知の探求

○ 陳 樹全（札幌市立大学）
横溝 賢（札幌市立大学）
ラスク ガブリエル（中京大学）
宮田 義郎（中京大学）
荒石 磨季（シャープ株式会社）

発酵は，食物を保存し，おいしく食すために人間が生み出した生存の知恵であり，そのために微生物を生きながらえさせることを目的に互いの共生を自覚的に行なってきた営みの一つである．この営みは生命活動のない発酵食品によって取って代わられ，私たちは自ら行うことは無くなった．本研究では微生物を贈ることから，他者と共に酵母を育て発酵の活動を支え合う実践を試みた．その結果，互いの受苦を類推することから自立した共生を相互に形づくる関係になった．一連の実践を省察することから関係者に起きていた共生の知の在りどころを考察する．

OR-03 風景の肉体

○ 中村 恭子（大阪大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

日本の古画に見られる書き割りのような図形平面の山並み風景は，　向こう側への視界を遮る知覚可能な限界として「バウンダリー」でありながら，　向こう側としてさえ概念化できない外部を召喚する「フロンティア」でもある．　明確に知覚される物質的な体に，外部という抽象性を召喚するとき，人にも「書き割りの風景としての肉体」が備わるのではないか．そのような創造様式を，北ヨーロッパ一円で発見されている湿地遺体をテーマに捉えた制作の実践から示す．

口頭発表 2

ORAL 2

9:00-10:30
#702-704

OR-04 消滅可能性農村の生活世界を縁りあわせる活動のデザイン

○ 伊藤 悠貴（札幌市立大学）
横溝 賢（札幌市立大学）

個人主義の社会により共同の糸が解かれ，人びとの拠りどころの形態がなくなりつつある．そのような時代の中で，消滅可能性農村に伝わる民間信仰によって血縁の繋がりが世代を超えて保たれてきた岩手県奥州市の農業集落“及川家”に着目し，その土地で生きる人びとの生活世界を見直し描き出す活動をおこなった．本稿では，描き出された生活世界から再び血縁や地縁の糸を編むことを“縁りあわせる活動”とし，縁りあわされた関係を再構築するデザインの知の在りどころを考察する．

OR-05 「どうしても思い出せない」を実験的につくりだす

○ 遠藤 瞭介（早稲田大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

思い出せそうで思い出せない.喉元まで出掛かっているが思い出せない.このような現象には英語に慣用句があり,Tip of Tongue Phenomenonという.近年では心理学でもこれを「舌先現象」と呼んでいる.日常的には頻繁に経験する舌先現象だが,これを意図的に作ることはできるだろうか.本研究では,味覚と視覚に特化した記憶実験において,舌先現象が作れる方法を示し,その意義について議論する.

OR-06 すべて天狗の仕業

○ 松井 哲也（大阪工業大学）

ヒューマンエージェントインタラクションの中でも、ユーザとエージェントが共同作業を行うヒューマンエージェントコラボレーションの分野は、ロボットやバーチャルエージェントの社会実装が進む中で大きな注目を浴びている。このヒューマンエージェントコラボレーションにおける課題の一つとして、作業中に失敗が起こった時に、ユーザがエージェントの責任をどのように見積もるのかというものがある。本研究では、エージェントが因果関係に基づいて自身の責任を認める場合と、エージェントが因果関係を明確にせずに自身の責任をほのめかす場合とで、ユーザがエージェントに対して感じる印象に差異が生じるかを検証した。

ORAL 3

口頭発表 3

12.10 Sun
502

OR-07「不在」を作ることで媒介者を召喚する

○ 郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

開放系を謳う多くのシステム概念は，内と外の循環において閉じ，想定外の循環外部に開かれることはない．絶えず外部を受け入れるためには，外部にとって，いま空であるが入るべき場所=「不在」と見做されることが必要となる.天然知能は，　外部を召喚する「不在」が肯定的アンチノミーと否定的アンチノミーの共立によって実現できると説いている.ここでは，　これを生化学反応に実装することで触媒の起源に関するメカニズムを提案する.

OR-08「言葉にできないこと」を言葉にする
- 書く・読む・奏でる -

○ 江藤 健太郎（早稲田大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

小説の「量」と「質」の網を破るものして，「言葉にできないこと」を言葉にすることを考える．実例として，ベケットと小島信夫における言葉の「隠れなさ」を見ていく．また，実作した小説の新たな表現として，小説の構造を音楽化し，それを奏でる自動演奏システム『抱擁楽器』の制作を構想，実装する.

OR-09 経験を語らうことから現れる〈共創する時空〉
- ランブリングデザイン運動が喚び起こすトポフィリア（場所愛）-

○ 横溝 賢（札幌市立大学）

ある土地の場所愛〈トポフィリア〉を相互に開示することから現れる〈共創する時空〉を考察する．２つの地域を対象に，現場を歩いて見つけた場所愛を住民と語らう道具のデザイン実践をおこなった．この道具を用いて特定の〈場所や物と結びつく私の心の所在〉を語ると，住民も自らの場所愛の記憶を語り出した．この時，双方の間に〈共創する時空〉が現れた．本稿では〈場所愛〉の相互開示がもたらす共創の理論構造を明らかにする.

口頭発表 4

ORAL 4

10:50-12:20
#702-704

OR-10 状態を忘れるセル・オートマトン　-忘却による臨界現象-

○ 谷 伊織（神戸大学）

「またりさま」は三輪眞弘によって発表された逆シミュレーション音楽と呼ばれる音楽作品である．この作品は複数のプレーヤーによって演奏され，手に持った鈴とカスタネットをどのタイミングで鳴らすかは決定論的なアルゴリズムによって決定される．　このため，演奏ルールは有限セルオートマトンとして記述することが可能であ り，シミュレーションによってその時 空間パターンを可視化すると，ECA におけるクラス III に相当するカオス的パターンが得られる．しかしプレーヤーが直前に自身が鳴らした記憶を忘れてしまうならば，そこにルールから逸脱する能動性が獲得され，忘却確率に応じて相転移を伴う臨界現象が観察される.

OR-11 空白としての現在
-メロンクリームソーダから -

○ 德山 祐耀（九州大学）
中村 恭子（大阪大学）

創造性について考えたとき，それは矛盾構造を構築し，その脱色によって空白域を設けることで為される．本論では一杯のメロンクリームソーダについてその構造を実践する．この飲み物が持つノスタルジアを，德山の個人的な体験を通して立ち上がる議論によって捉え，ノスタルジアと，付随する過去でも現在でもない時間の両者が有する創造性について考察したのち，作品制作の実践を通して，痕跡としてのノスタルジアを実装することを試みる.

OR-12 空間認知の人称性と記憶の人称性の相関について — あやとりによる発見

○ 杜 越（早稲田大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

本研究では，記憶と空間認知の認知プロセスに焦点を当て，特に人称性の役割を探求した．記憶の人称性が記憶の鮮明さと関連し，異なる人称性が異なる認知プロセスに影響を与えることが示唆された．さらに，異なる学習方法が記憶回想方法に及ぼす影響を調査し，第三人称学習での三人称視点の記憶回数が再現回数に有意な影響を与えることが明らかになった.

ORAL 5

口頭発表 5

12.10 Sun
502

OR-13 竹の粉を用いた表現活動による文化的持続性の可能性 - 大分県日出町におけるフィールドワークを通じて -

○ 上田 純也（武蔵野美術大学）

本稿は，地域資源の保全と活用を探求するため，大分県日出町での産学連携プロジェクトを通じて，地域の持続可能な発展と地域コミュニティの活性化に寄与するデザインの役割を探索した．リサーチを進める中で，竹産業が抱える厄介な問題に焦点を当て，地域コミュニティの創造力を喚起するための「竹の香」を制作・展示し，地域住民との対話を行った．プロジェクトの結果を踏まえて水産業など他の産業にも適用し，今後の研究を検討する．

OR-14 コント・笑いに量子論理の構造は見つかるか？

○ 中野 巧巳（早稲田大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

コントの構造を量子理論と見立て構造化し,束の相補律,分配率に則して構造を評価する.実例として複数個のコントを選出しそれぞれ分節して,発話間の関係を二項関係の時系列として表す.そして,発話に関する条件を満たす発話集合をグラフ化し,複数の文脈が存在して互いに接している構造を取るかどうかを評価する.

OR-15 まちなか動物園 -見立て観察と仕立て作業を組み合わせたアイデア生成学習の開発 -

○ 福田 大年（札幌市立大学）

本稿では，風景から動物を連想する「見立て観察」とその観察結果を他者に向けて表現する「仕立て作業」を組み合わせた「まちなか動物園」の実践を解説する．そして，まちなか動物園を複数回体験したデザイン初学者らの作品の特徴とその特徴の変化を概観し，デザイン初学者向けのアイデア生成学習プログラムとしての可能性を考えた．その結果まちなか動物園は，既存の要素の収集と再構成の経験的な学習過程になる可能性が示唆された．

口頭発表 6

ORAL 6

13:10-14:40
#702-704

OR-16 シロアリの歩行における外的刺激の影響

○ 大澤 慶彦（早稲田大学）

シロアリの歩行パターンについて報告する。外的な刺激によるシロアリの具体的な歩行パターンの変化は知られていない。本実験では、シロアリを入れたシャーレに一時的に振動を与え、環状通路におけるシロアリの歩行パターンの変化を観測した。実験の結果、まず、通常時におけるシロアリの位相の変化が非定常的にゆらいでいることが分かった。また、シロアリは振動を受けると歩行を速め、群れは一時的に散開するものの、その状況でもレヴィ歩行や非定常ゆらぎといった通常時の性質が保たれることが分かった。

OR-17 太鼓のリズムに出会う ～和太鼓の鑑賞実験を通して～

○ 野村 翔琉（早稲田大学）
郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）

和太鼓にはメロディーがなく，身体の動きや音のアクセント，スピードを変えることで表現する．しかし和太鼓のリズムは独特であり，和太鼓に馴染みのない人々は垂れ流し状態で聞いてしまっていることが多い．そこで実際にメロディーを主とする現代曲を和太鼓に置き換え，太鼓演奏経験者がどの曲を和太鼓で表現したか判別してもらう実験を提案する．ほとんどの人は普段J-popをはじめとしたメロディーのある楽曲を聴き楽しんでいると思うが，そんな彼らがシンプルな「ドン」という音の連続，モノクロの世界に困惑しながらも何かを見つけだす，分かろうとするときに和太鼓奏者の予想とは違った結果が得られるのではないだろうか．

OR-18 関係性の穴から捉える時系列間結合の複雑性

○ 春名 太一（東京女子大学）

本稿では，順序パターン解析と位相的データ解析の手法を融合した，多変数時系列における時系列間結合の複雑性を定量化する方法を紹介する．この方法では，与えられた多変数時系列の一定の時間区間における各時系列の順序パターンを抽出し，それらの交わりにもとづいて時系列間関係を反映した「図形」を構成する．時間区間を伸ばしていくと「図形」は成長し，「穴」が生じたり，消えたりする．このような「穴」は時系列間に局所的には関係があるが大域的にはある意味で関係がないことを表しており，パーシステントホモロジーを用いて測ることができる．その振舞いから時系列間結合の複雑性を捉えることができることを，二つの例を通じて議論する．

共創学会第7回年次大会　実行委員会

実行委員長：	笹井 一人（茨城大学）
副実行委員長：	谷 伊織（神戸大学）
プログラム委員長：	澤 宏司（同志社大学）
プログラム委員：	笹井 一人, 谷 伊織, 澤 宏司, 西 洋子（東洋英和女学院大学）, 三輪 洋靖（産業技術総合研究所）, 郡司 ペギオ 幸夫（早稲田大学）, 三輪 敬之（早稲田大学）, 中村 恭子（大阪大学）, 金尾 雄二（障害者総合支援法指定事業所「からしだね」）
出版担当：	三輪 洋靖
広報担当：	谷 伊織, 西 洋子, 笹井 一人
財務担当：	三輪 洋靖
大会事務局担当：	笹井 一人
アドバイザー：	三輪 敬之, 郡司 ペギオ 幸夫, 金尾 雄二, 中村 恭子

共創学会第７回年次大会 パンフレット
『共創する時空、いま・ここ』

発行日	2023年12月1日
主催	共創学会
発行	共創学会第７回年次大会実行委員会 https://nihon-kyousou.jp/event/sfcc2023/